

◆ *Furusato Obara Club*

Take Free [0円]

おはらのじかん

— 第8号 —

2016 Summer

おはらの作家さん大集合

巻頭
特集

小原の作家さん
故加納俊治氏宅を訪ねて

[おかえりなさい] 両親の暮らす小原にターン

[小原のパワースポット]

[マンガイカくんキンちゃんの小原日記]

[小原いろいろ情報]



小原人集まれ! 「おばちゅう卒」

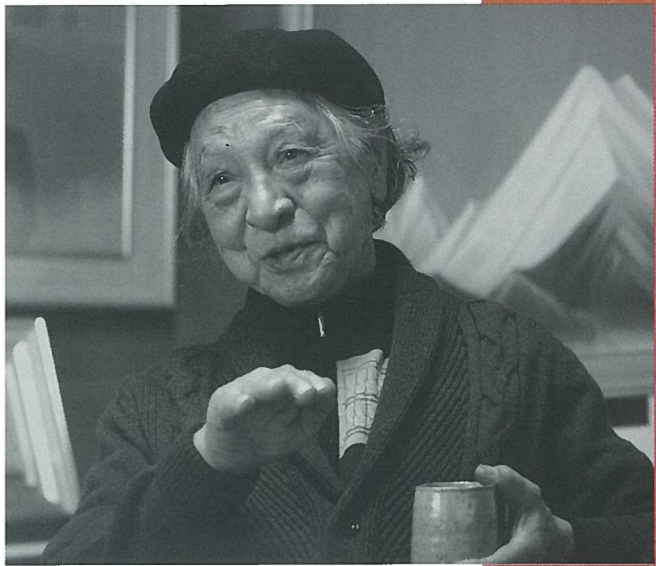
www.facebook.com/obachuu

おばちゅう
以外でもOK

頭集
巻特

小原の作家さん

故加納俊治氏宅を訪ねて



7月半ばの、梅雨明けも近い休日に、故加納俊治氏のご自宅を訪れました。俊治さんは、惜しくも2015年9月に86才で他界されましたが、藤井達吉翁の直弟子の一人で、日本の和紙工芸分野の第一人者でした。妻の啓子さんと娘の登茂美さんから、この小原の地で創作を続けられた故人の原点とその継続を支えた信念についてうかがいました。



まず出迎えて下さったのは娘さんの加納登茂美さん。ご自身も和紙工芸作家として幅広く活躍されています。案内されたのは敷地内にある工房に併設されたギャラリーの二棟。庭には様々な草木が絶妙な配置で茂り、季節を彩っています。聞けば、すべてお父様の俊治さんが選ばれ育てられてきたとのこと。

その中の、ホトトギスが揺れる一角に、ひかえめに佇む歌碑がありました。「鶯乃声をききつる年ごとに花ざか李なりおばら山里」と詠まれています。これは小原農村美術館完成の折に、藤井達吉翁が詠んだ歌に対する、俊治さんの返歌との事でした。

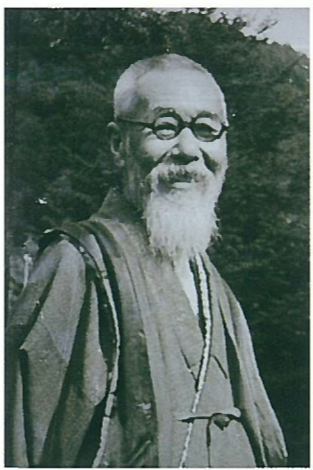
少し歩を進めると、先ほどの歌碑よりも二まわりほど大きな自然石があり、

「小原野に春は来にけり鶯のおきよおきよと声をかぎりに」と詠まれています。先の俊治さんの返歌を生んだ、藤井達吉翁の歌が刻まれています。

この歌碑は、庭からギャラリーに入る障子を開くと、ギャラリー空間の正面に位置し、悠然と佇んでいます。

この一対の歌碑は、藤井達吉翁と俊治さんとの深い絆を象徴するものでした。

ほどなく、ご自身も和紙工芸作家である奥様の啓子さんも同席され、俊治さんの若い頃の



秋光 [213×115 額装] 2013年



お話を伺うことに。

俊治さんは、十代の頃から思想哲学・宗教に関心を持ち、東京で語学も学びましたが、戦後は故郷で自分の歩む道を求め、ある牧師の元で聖書を学んでいました。その頃、のちの人生の師となる藤井達吉翁に出会い、衝撃的な感銘を受け、時には寝起きを共にし、日々、あらゆる分野で学びを受けられたとのこと。

その学びは深く広く、礼儀作法・花鳥風月に対する心の寄せ方・観察者としての鋭い視点・食文化や人に対する細やかな心配りまで、人として生きてゆく上で最も大切な根幹と、創作者表現者としての在り方と技術を磨かれたそうです。

続いて、漆芸家の高橋節郎先生との出会いのお話。高橋節郎先生は俊治さんの創作活動における客観的な批評者でしたが、さらに、子どもにない高橋夫妻から、息子のように可愛がられ、互いに信頼し合い、尊敬し合う関係と

なりました。

そしてもう一人、親日家のイタリア人、フオス・コマライーニ氏との出会い。マライーニ氏は、人類学者・東洋学者・写真家・登山家でもあります。

第二次世界大戦前から、アイヌ民族の研究のため、たびたび訪日していましたが、戦況の変化によりマライーニ氏とその家族は、奥様の実家である広済寺(東広瀬町)を停留地として、時期を過ごしました。その時のご縁が現在まで続いていて、人類学者として世界中の少数民族に心を寄せる高潔な彼の生き方は、俊治さんに大きな影響を与えたそうです。

このお三方は「三人の父」とも言える存在だったとのこと。それぞれに理想を暖め、実践し、人と自然に向い合う。そうした出会いが俊治さんの人間形成の二翼を担い、彼が目指す境地への姿勢を培いました。

俊治さんは、お茶を飲む時、手にした器を通



左:娘の登茂美さん 右:妻の啓子さん

して作者を感じ、語り合う事ができると言い、そうした時間を大切にされてきたそうです。

それは、陶芸に限らず、小原独自の産業を興すことの大切さを藤井達吉翁に教えられた、俊治さんの修業時代に根ざす実感と言えるのでしょう。

晩年には折にふれ「藤井達吉先生の教えを皆で検証し、受け止め、実践し、次の世代へ繋げて欲しい」とよく言われていたそうです。

俊治さんが人生をかけて学び大切にされてきたことは、現在も決して古くなく、時代を越えて私達にも共有できる貴重な財産であり課題だと思いました。

快く取材に応じて頂いたご家族の皆様、ありがとうございました。



M.Y

【略歴】日展参与/日本現代工芸美術家協会参事 銀座和光で個展開催/愛知県芸術文化選賞/豊田文化賞/夫婦二人展(豊田市美術館) 海外研修二三次/中日文化賞/豊田市特別功労賞

文化香る小原の作家さん大集合
小原の作家さん

小原和紙工芸は、総合芸術家 藤井達吉翁が、80年ほど前に丁装に使う和紙を小原に求めたことが縁となり生まれました。その教えを元に、小原の文化・芸術は発展を遂げました。そんな風土の育む、小原地区に住む現在のいろいろな作家さんたちをご紹介します。

※作家さんは小原在住の方を基準に掲載のお願いしました。

作家さんの都合や、連絡が取れない、存じあげなかったなど、掲載できなかった作家さんもございます。ご了承ください。

[漆芸家] 権現坂工房 安藤 和久



1965 関西大学経済学部卒業
2009 文部科学大臣賞受賞 (明治神宮・漆の美展)
2013 豊田芸術選奨受賞

オブジェ作品 II 「漆と紙」
現在 日本漆工協会事業推進委員漆工学会会員
新匠工芸会員
小原大倉町 TEL:0565-65-3309

[漆芸家] 笹平工房 安藤 源一郎



2014 東海伝統工芸展「名古屋市長賞」受賞
2015 日本伝統工芸展「日本工芸会新人賞」受賞

紙胎陶器青嵐盛器
2016 東海伝統工芸展「岐阜県教育委員会賞」受賞
北條平町 TEL:0565-65-2450

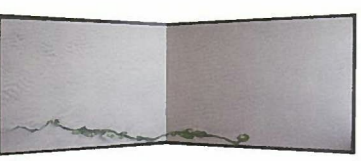
[漆芸家] 笹平工房 安藤 則義



2011 日本伝統工芸会奨励賞「受賞」
2014 日本伝統工芸展「文化庁賞」受賞

紙胎草花文合子
現在(公社)日本工芸会理事 東海支部幹事長
日本文化財漆協会理事
北條平町 TEL:0565-65-2450

[和紙作家] 工房 野草子 安藤 真人



湖うみ [60×176 風炉先屏風]
小原大倉町 TEL:0565-65-2086

[和紙作家] 春日井範之工房 春日井 範之



臥龍の桜 [90×180 額装]
1970多摩美術大学日本画(加山又造教室)卒業後和紙工芸を始める
1974日展入選(12回) 全友推挙 1989名古屋三越にて個展(18回)
永太郎町 TEL:0565-65-3386

[和紙作家] 春日井和紙工房 春日井 保裕



日展入選5回
日本新工芸展入選8回
光風会展入選8回
(光風奨励賞受賞)
中部就展入選4回
(奨励賞受賞2回)

瀑(額装)
上仁木町
TEL:0565-65-3061



親の暮らす小原にイターン娘が旦那さんを連れて「イターン?」。普通は「イターン」というが…。下仁木に「梅乃屋」さんというアンテナをアツカウカフエがあるのを知ってますか?この主人夫妻が小原に来たのが15年前。すでに成人していた娘さんは街で暮らし、両親だけが小原へ…ということで、親元へは「お帰りなさい」だが娘さん夫婦は「イターンになる」という話。

旦那さんの窪田篤(アツシ)さんは浜松の米屋さんで20年務め、米のコンテストの審査員もしている米のエキスパート。そして浜松では畑で野菜作りもしていたという農業青年。「小原の米はどうですか?」と聞いたら「小粒だけどしつこくなく食べやすいレベルの高い米」といい評価だった。

奥さんの窪田ルミ子さんが浜松のヨガスタジオでインストラクターをしていた時知り会い結婚。出会いのキーワードは「ベジヨガ」。自然農法の畑をしていて彼女が「野菜を作るなら両親の暮らす小原へ行こう」と半年前に15年振りに両親との同居と相成った。篤さんは小原にきた直後から畑探しに奔走。今では条件の違う畑を3つ耕し、炎天下の中、育つて来た野菜作りに飛び回っている。「この人、本当に農業やる気だ」。小原は過ごしやすい空間で時間を忘れてしまうという。ルミ子さんはマイナスイオンいっぱい的小原でヨガ教室を開く準備中。「親子ヨガ」をやりたい…と夢は広がる。

M.T



おかえりなさいオバラっ子
両親の暮らす小原にイターン

昔、平畑町に就業の後バクチに興ずる人々がいまして。彼らは賭場に通う前に下井戸の水を飲んで行く。「運」がつくといい、負け知らずだったそうだ。そんなうわさが広がり井戸の水を飲んで「運」を拾ったと言われています。

T.S



小原のパワースポット
キャンブル好きには嬉しい!
宝を呼ぶお水
お宝運水

おばら地区の物件を探すなら!

豊田市 空き家バンク 検索
www.city.toyota.aichi.jp/akiya/

小原の情報ページ 以外人もOK!
『おばちゅう卒』是非登録してね!
www.facebook.com/obachuu

- 【8月21日】ガサガサイベント 子どもたちと矢作川でガサガサ遊ぼう。
- 【8月27日】小原防災フェスタ
- 【9月25日】小原スポーツフェスタ
- 【10月23日】小原文化まつり
- おばらイベント
- 【8月7日】和紙良いフェスタ
- 【8月15日】小原夏まつり



小原恒例の夏まつり、花火大会では200発の花火が打ち上げられ、目の前で見られるため迫力満点。

小原いろいろ情報

小原白字感 編集後記

小原は作家さんが多いと聞くが実際は?と今号は始まりました。心良く掲載をいただいた作家の方々、ありがとうございます。紙面の関係で文字が小さかったりしますがここから交流や新しい何かが生まれると嬉しいです。

今回の新しい出会いは目も心も洗われました。毎日の暮らしの中のささやかながら愛おしく大切なもの、人との縁の中に築かれる信頼と絆。自然体で力まず、曇りの無い心そのままにごく普通に実践されている皆さんでした。

イメージって大切な…と思います。いいイメージならなおさら、人から小原って…。1位四季桜、2位和紙、3番目は作家さんとかアーティストがたくさん住んでる…なんですね。自然と人の表現、街と田舎の入り合う場所～それも「里山」ならではだと思えます。

お店に入ると、そこに足音もなく現れたのは沢山のニャーの声。初めての梅乃屋さんで受けた歓迎にしばし固まる私。はじめは戸惑う指も気まぐれな態度に連射モードへ。レンズ越しのツンデレに出会った頃の君を思い出す。

T.S(今号編集長) M.Y M.T H.Y